
勇者 = 魔王です。

syokunn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者Ⅱ魔王です。

【Nコード】

N1335I

【作者名】

syoukun

【あらすじ】

魔王を倒した勇者一行。しかし、そんな皆には秘密があった！！？

（前書き）

小説初投稿です。面白くありませんが、よろしく願います。

勇者、それは天から力を与えられ、闇を討ち滅ぼす存在。

魔術師、それは魔術を駆使して四大属性を操り、常に勇者を後方から援護する者。

劍士、それは劍術にたけ、常に勇者の右腕と成り、時には友と、時にはライバルとして競い合う者。

僧侶、それは皆が傷ついたときに、癒し、持久戦には欠かせない存在である。

盗賊、それは汚き盗人。魔王を倒したら牢屋に行ってもらうつもり。

•

•

•

•

•

•

•

$$\vdots$$

「……ねえ、俺の説明酷くない？つてか、え？俺捕まるの？」

「答えてよ!？」

[illegible]

「もういいよ！？・・・グスン。」

「さーって魔王城行きますか。」

「そうね、休憩終わったし。」

「そうだなもうソロソロでつくしな。」

「そうですね、早く行きましょう。」

上から順に、勇者、魔術師、剣士、僧侶である。

「俺完全に無視！！？お前ら皆実は腹黒だろ！！？」

ギロツ!!!

「ヒイツ！！そんな皆一斉に睨まないでよ〜。」

これが今代の勇者一行である。

「グワアアアアアアアツ！！！」

「……さて、無事（盗賊以外）魔王を倒した勇者一行。だが、ここでひとつ問題発生。

「魔術師、お前が最後に使った魔術は一体何だ？」

「僕、知っていますよ。あれ、古代呪文ですね？しかも、禁忌の闇呪文、「ツエルヴィゲ」ですね？」

禁忌の闇呪文「ツエルヴィゲ」……それは心悪しき者にしか使用できない、禁呪である。

「おいおいおい、何だってお前がそんなもんを……。」

「うるさいわねっ！！皆してあたしを攻めて！知ってるのよ、僧侶アンタ、実は死呪術の方が得意らしいじゃない？しかも町の一般市民に向かってそれむちゃくちゃ使ってたの知ってるわよ？」

死呪術……それは当たると絶望の夢を見ながら死んでいくという恐るべき術である。

「ええっ！？何でそれを？僕あのときちゃんと変装して」

「私を誰だと思ってんのよ？魔術師よ？あんな変装屁でもないわ。」

「僧侶、お前まで……。」

「うるさい、うるさい、うるさいっ！！人を攻められたものか、勇者。君のその持っている剣、それは聖剣じゃなくて、魔剣だろ？」

魔剣……それは闇に心を売った者が持つという聖剣の対に有る剣。

「な、なぜ解った？」

「途中で寄った王立図書館で偶然資料を見つけたのさ。」

「……くっ！！！」

「勇者、お前……。友達だと思ってたのに、裏切っ」

「やつかましいわ!!! 剣士俺は知っているぞ!!! 今まで言わないでおいたがああ!!! いいともさ言ってやる!!!」

「な……。何をだ??」

「剣士、お前は殺人快楽者だな!? 人を殺して快感を得る、殺人快楽者だろう!!!」

殺人快楽者……。それは、人を殺して快感を得る、変態だ。

「け、剣士……。あなたがそんな変態だったなんて……」

「剣士、それは僕も無いと思うよ……。」

みんなドン引きである。

「ダーツ、ウルツセエなあっ!!! 第一、証拠はあんのかよ証拠は!?!」

「ああ、あるともさ。」

そう言つて勇者は数枚の写真を出した。

「つこ、これはっ!!!? 俺が悪徳領主を殺しているときの。こつちは森の魔女を殺した後の。こつちは僧侶と一緒に町民を皆殺しにしたとき?!?!?!? お前、このとき居たのか?」

「ああ、いたよ? 物陰に隠れてたからわからなかっただろうがなあ?」

「つていうか、見てよ僧侶。全部顔がにやけてるう……。キモッ!!!」

「ええ、魔術士さん。つていうか、全部チ。コ勃つてません??」

「うえゝ、マジでキモイ。」

「皆、ちよつと聞いてくれないか?」

「ん? なに、勇者?」

「……。ああ、実は魔王を倒した今、普通なら国王のところに帰らなきゃいけないんだが、」

「ええ、そうね……。」

「しかし、一国の国王がくれる金なんてたかが知れてる。そこで提案なんだが、俺達で魔王軍、やってみないか??」

「……皆数秒沈黙。」

「……」

「……いいんじゃないかしら？」

「……いいかもしれませんね。」

「なあ、人殺せるかな？？」

「皆、ありがとう。そして剣士、たくさん殺せるぜ？」

「ヒャッホウッー！」

「そこでまずは、僧侶、盗賊を起こしてきてくれ。」

「ん？何で？アイツ役立たずでしょ？死んで良くない？」

「いや、まずは俺達が死んだことを知らせなきゃいかん。それであいつに行つて貰う。」

「でも、あいつが裏切ったら？」

「大丈夫。元が汚い職業だし、アイツにはどつかの部隊の隊長の座でもやりやあ絶対裏切らんだろ。」

「そんじゃあよろしく、魔將軍。」

「ん？ぼくが？んふふ、やったね！」

「勇者、私には？」

「俺は魔王になるから、お前俺の側近で良いか？」

「お給料良い??」

「結構良いぞ？」

「ならやる!!」

「勇者、俺には??」

「お前は……切り込み隊長でいい??」

「……微妙だな。」

「いや、人いっぱい切れるぞ??」

「マジで!?!ならやる。」

こうして、勇者一行改め、魔王軍一瞬で復活しました。

この魔王の代では、国王が再び勇者一行を作るも、魔王に行くどころか、国を出るまでも無く、魔王軍切り込み隊長にやられたという勇者の最後の言葉は「け、剣示唆」ということで、コレを聞いた人は皆一様に何が言いたかったのだと首をひねるらしい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1335i/>

勇者 = 魔王です。

2010年11月13日14時22分発行